



菅波 茂

ルワンダ難民が再び世界の焦点になっている。1994年のザイルのゴマでの惨状は世界の救援を必要とした。AMDAも医療チームを派遣して救援活動に参加し、現在はルワンダ本国に入りザイルから帰還する大量の難民のための医療活動に従事している。

今回のルワンダ難民救援医療活動に対して「AMDAアフリカ多国籍医師団構想」の実現を在京アフリカ外交団団長であるファラー・シプチ大使にお願いした。実は95年12月のブトロス・ガリ賞祝賀会にてファラー大使より同構想の

提唱を受けていた。大使の呼びか

けに応じて、現在14カ国の大使が設立に同意し、今後増える予定である。早速、本国に医師団派遣の要請をしてきている。

アフリカ多国籍医師団発足

AMDAは既にアジア多国籍医師団を発足させ、アジア、アフリカ、旧ユーゴスラビア、チェチェンなどに派遣している。当然、今回のルワンダ難民救援医療活動にもアジア多国籍医師団は参加している。これにアフリカ各国からの医師たちが加わる予定である。

医師団か。

なぜ、アジア多国籍
なぜアフリカ多国籍医

師団なのか。それはAMDAの「人道援助の三原則」に基づくものである。①人間だれでも他人の役に立ちたい気持ちがある②この気持ちの前に国籍、人種、民族、宗教、文化、そして生活などの差はない③援助を受ける側にもプライドがある――。アフリカの国々は自らの問題解決に参加することにより国としての誇りを持つことになり、それを可能にすることで、支援する日本に対しての理解と信頼が高まることは決定的である。「イコールパートナーシップ」は援助を受ける側が何にましても熱望するものである。何よりもアフリカ人の気持ちはアフリカ人が一番理解出来るという事実を忘れてはいけない。

(アジア医師連絡協議会代表、
題字は筆者)